畫家とセリセリス

南部修太郎

青空文庫

1

それが癖のいつものふとした出來心で、銀座の散歩の道すがら、畫家の夫はペルシア更紗の壁掛を買つて來た。が、家の門をはひらない前に、彼はからつぽになつた財布の中と妻の視線を思ひ浮べながら、その出來心を少し後悔しかけてゐた。始終支拂ひに足らず勝ちな月末までにもう十日とない或る秋の日の夕方だつた。

「あら、またこんな物を買つてらしたの？」

さすがに隱しきれもせずに、夫がてれ臭い顏附でその壁掛の包みを解くと、案の條妻は非難の眼を向けながらさう言つた。

「うん、近い内に取り掛かる裸體のバツクに使ふ積りなんだよ」

「まア。うまい言譯をおつしやるのね」

と、妻は口元に薄い笑ひを浮べた。

「いや、ほんとだよ」

「ふふふ、怪しいもんだわ。始終そんな道具立てばかりなすたつて、お仕事の方はちつとも運ばないぢやないの」

「そんな事はない。今度はきつとする。展覽會の方の約束もあるんだから…」

「どうだか、またいつもの豫定だけなんでせう」

妻は微笑をつづけながら言つたが、そこで不意に眞顏になると、

「だけど、あなたは、ほんとにお氣樂ね」

「何が？」

「何がつて、もう少し家のことや子供のことを考へて下すつたつていいと思ふわ」

「考へてないと思つてるのか、君は？」

と、夫も少し顏色をあらためた。

「だつて、考へていらつしやらないも同然だわ。今日はもう二十日過ぎよ。それに、こないだから、子供の洋服や靴をあんなに買つてやりたいつて言つてたぢやないの？」

「それがどうしたと言ふんだい？」

夫はふてくされた氣持で言ひ返した。

「まア、空とぼけるなんて卑怯だわ。そ、そんな贅澤な壁掛なんかを氣まぐれにお買ひになる餘裕があるんならつて言ふのよ」

「だから言つてるぢやないか。仕事に使ふんだつて…」

「※ウ、あなたのいつもの癖にきまつてるわ。ねエ、子供の洋服や靴は必要品よ。それに、月末だつてもう近いんだし、何もそんなあつてもなくつてもいい壁掛なんかを今お買ひになることないぢやありませんか」

「分らないなア、仕事に使ふんだつて…」

「よして頂戴、そんな逃げ口上は…」

と、妻は強く夫の詞を遮りながら、眼の前の更紗模樣に侮蔑的な視線を投げた。

「とにかく、あなたが始終こんな氣まぐれな贅澤ばかりなさるから、月末の拂ひが足りなかつたり、子供の身のまはりをちやんとしてやれないのよ。考へても御覽なさい、夏繪は來年もう學校よ。暫くはまだいいけれど、さうなつてから今のやうなのはあたしまつぴらだわ。第一、こんな暮し方をしてゐて、さきさきどうなるかと思ふと不安ぢやなくつて？」

言ひながら、妻はまともに夫の顏を見た。

夫は思はず眼をそらした。すつかり弱味を突かれた感じで内心まゐつた。が、そこで妻の非難をすなほに受けとるためには夫の氣質はあまりに我儘で、負け惜みが強かつた。それに自分でも可成り後悔しかけてゐる矢先だつたのが、反撥的に、夫の氣持をあまのじやくにした。

「ふん、それでまた貯金でもしたいつていふ例の口癖だらう?」

「だつて、さうでもしなかつたら…」

「よせ、よせ。僕はそんな貯金なんて、けち臭い、打算的なやり方は大嫌ひだ。なアに、その時はまたその時でどうにかなる。いや、きつと、どうにかするよ」

「だけど、あなたのそのどうにかするつていふことほど、いつも當てにならないのはないぢやありませんか」

「然し、お互に日干しにもならない所を見ると、たしかにどうにかなつて行きつつあるぢやないか」

「あア、あなたにはとても叶はない」

妻はふつと笑ひ出した。

「何しろ何だ、そんな世帶染みた事を言ふなアよしてくれ。聞いただけでもくさくさするよ」

と、夫は調子に乘りながら、

「貧乏畫家の妻として三年間で三百圓溜めたあたしの經驗か?」

「厭や、厭や、そんなに茶化しておしまひになるの…」

妻はちよつと夫を睨むやうにしながら、

「ほんとにあたし眞劍に言つてるのよ。お願ひですから、子供にだけは、子供にだけはみじめな思ひをさせないやうにね」

「分つた、分つた」

不意にうるんだ妻の瞳を刹那に意識しながら、夫はわざと投げつけるやうに言つた。何か重いものが胸に來た。そして、夫は壁掛を手に取ると、急ぎ足にアトリエの方へ立つて行つた。

2

二三日經つた或る晴れた日の午後だつた。朝の半日をアトリエに籠つた夫は庭で二人の子供と快活な笑聲を立ててゐた長女の夏繪と四つになる長男の敏樹と、子供好きの夫は氣持よく仕事が運んだあとでひどく上機嫌だつた。

「さあ、夏繪。今度はうまく受け取るんだぞ。そら、ワン、ツウ、スリイ…」

と、夫は四五間向うに立つてゐる子供の方へ色どりしたゴム鞠を投げた。が、夏繪は息込んでゐたのがまたも受け取りそこねて、鞠は色彩を躍らしながらうしろの樹蔭へころがつて行つた。

「駄目よ、パパア。そんなにひどくはふつちやア…」

と、夏繪は紺のスカアトを飜しながら鞠を追つた。

「そオら、今度は敏樹はふつて御覽…」

「うん…」

と受け答へて、茶色のスエエタアを着た、まるまる肥つた體をよちよちさせながら、敏樹は別の小さな鞠を投げた。が、見當はづれて、それは夫の横へそれてしまつた。

「やアい、パパだつて下手だわ」

途端に、夏繪は手を叩きながら、復讐的に野次り立てた。

わざと大袈裟に頭をかきながら、夫は鞠を追つた。そして、庭の

一隅の呉竹の根元にころがつてゐるそれを拾ひ上げようとした刹那、一匹の蜂の翅音にはつと手をすくめた。見返ると、黒に黄色の縞のある大柄の蜂で、一度高く飛び上つたのがまた竹の根元に降りて來た。と、地面から一尺ほどの高さの竹の皮の間に蜘蛛の死骸が挟んである。蜂はそれにとまつて暫く夫の氣配を窺つてゐるらしかつたが、それが身動きもしないのを見ると、死骸を離れてすぐ近くの地面に飛び降りた。そして、暫くあたりを歩きまはつてゐたが、ちよつとした土の凹みにぶつかると、嘴と前脚で穴を掘り出した。

（セリセリスだな。）

いつか讀んだアンリ、フアブルの「昆蟲記」を思ひ浮べながら、夫は好奇の瞳を凝らした。そして、ばたばた近寄つて來た夏繪と敏樹を靜にさせながら、二人を兩方から抱きよせたまま蜂の動作を眺めつゞけてゐた。

蜂は絶えず三人の存在を警戒しながらも、一心に、敏活に働いた。頭が土に突進する。脚が盛に土をはねのける。それは靜に差した明るい秋の日差の中に涙の熱くなるやうな努力に見えた。そして、一厘二厘と、穴は小さな蜂の體を隱すほどにだんだん深く掘られて行つた。

「パパ。あの蜂何してるの」

と、息を凝らしてゐた夏繪が低く尋ねかけた。

「うん、今あの穴の中へ子供を生みつけるんだよ。」

と、夫は何か胸を打つものを感じながら小聲に答へた。

全くわき眼も振らないやうな蜂の動作は變に嚴肅にさへ見えた。そして、瞬きもせずに見詰めてゐる内に、夫はその一心さに何か嫉妬に似たやうなものを感じた。すぐ夫は傍から松葉を拾ひ上げて穴の中をつつ突いた。と、蜂はあわてて穴から出て來たが、忽ち松葉に向つて威嚇的な素振を見せた。

「あら、蜂が怒つてよ」

と、夏繪は恐れるやうに囁いて夫の手を抑へた。

が、惡戲氣分になつて、夫は手を引かなかつた。そして、なほも蜂の體につつ突きかかると、すぐ嘴が松葉に噛みついた。不思議にあたりが靜かだつた。が、やがて不意に松葉から離れると蜂はぶんと飛び上つた。三人ははつとどよめいた。けれども、蜂は大事な犧牲の蜘蛛の死骸を警戒しに行つたのだつた。で、その存在をたしかめると、安心したやうにまたすぐ穴の所へ飛び降りて來た。

「パパ、また穴を掘るよ」

と、しやがんで膝にぢつと兩手をついたまま、敏樹が何か恐れるやうな聲で囁いた。

穴はもう殆ど蜂の體のすべてを隱すやうな深さになつてゐた。が、蜂はまだその劇しい勞働を休めなかつた。そして、その間にも絶えず三人の樣子を警戒し、なほも二三度蜘蛛の死骸の存在をたしかめに行つた。

（本能、これがただ本能だけで出來ることか知ら？）

その眞劍さに打たれて、夫はそんな事を考へつづけながら、ぢつと瞳を凝らしてゐた。

體が穴の中にすつかり見えなくなるほどの深さになると、蜂はやがてほつとしたやうにそとへ出て來た。そして、なほも警戒するやうに念を入れるやうに穴のまはりを歩きまはつてゐたが、やがてひよいと飛び上ると、蜘蛛の死骸をくはへて再び穴の所へ舞ひもどつて來た。

「まア、あの蜘蛛どうしたの？　死んぢやつてるのね？」
「うん、蜂に殺されたんだよ。そして、あれが蜂の子供の御飯になるんだよ」
「御飯に？」
「うん、だから見てて御覽。今にあの穴の中へちやんとおしまひするから…」
「蜘蛛なんておいしくないね、パパ…」
敏樹が上ずつた聲を挟んだ。
「でも、蜂の子供には御馳走なんだよ」
穴の二三寸手前に降りた蜂は、やがて頭と前脚で蜘蛛の死骸を穴の深みへ押して行つた。そして、それを押し入れきつてしまふと、蜂は今度は逆にあとずさりしながら、自分の尻の方を穴の中へ差し込んだ。と同時に、穴のそとに出た頭と前半身が不思議な顫動を起しはじめた。
「まア、をかしい、何してるの？」
と、夏繪が頓狂な聲を立てた。
「しつ、穴の中へ卵を生みつけてゐるんだよ。そしてね、來年の春になつて卵がかへると蜘蛛が蜂の子供の御飯になるのさ」
と、話し聞かせてゐる内に、夫の頭の中には二三日前の妻との對話が不意に思ひ浮んで來た。夫は我知らず苦笑した。蜂の眞劍さが、その子供に對する用意周到さが何か皮肉に胸に呼びかけてゐるやうな氣持だつた。
不思議な顫動が何か必死的な感じで二三分間つづくと、蜂はやがて穴のそとへ出て來た。そして、ちよつと息を入れたやうな樣子をすると、今度はまた頭と前脚を盛に動かしながら掘り返した土で穴を埋め出した。而も、幼蟲が出易くするためであらう、蜂は明にこまかい土の選擇に氣を附けてゐるらしかつた。さうして穴がすつかり埋められてしまふと、蜂は暫く穴のまはりを歩きまはつてゐたが、やがてぷうんと翅音を立てながら、黒黄斑の弧線を清澄な秋の空間に描きつつどこともなく飛び去つて行つた。
「はつはつは、パパは馬鹿だな、ほんとにパパは馬鹿だな」
と、立ち上りざま、夫は高い笑聲とともに不意に無意識にそんな事を呟いた。そして、兩方の手で夏繪と敏樹を自分の體の方へ引き締めるやうにしながら、庭の樹の間をアトリエの方へ歩き出した。

青空文庫情報

底本：「新進傑作小説全集14　南部修太郎集・石濱金作集」平凡社
　　1930（昭和5）年2月10日発行
入力：小林徹
校正：伊藤時也
2000年8月7日公開
2006年1月10日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

畫家とセリセリス

南部修太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/